



**梅原利夫先生ついて(2017年度和光大学最終講義
2018年2月3日 和光大学E-101教室：特別企画 梅原
利夫教授退職記念)**

著者	山本 由美
雑誌名	和光大学現代人間学部紀要
巻	12
ページ	208-210
発行年	2019-03-08
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00004648/

梅原利夫先生について

山本由美 YAMAMOTO Yumi

1 経歴と研究

梅原利夫氏は、1979年から39年間、和光大学に勤められ2018年3月に退職された、創立期以降の本学を代表する教育者、研究者である。また、和光学園における教育の発展と自身の教育学をリンクさせて発展させてこられた数少ない研究者でもある。

1947年、東京に生まれ、東京大学工学部で応用化学を学ばれたが、3年生終了時に「実践的な人間研究」をめざして教育学部教育行政学科へと学部変更され、その後東京都立大学大学院修士課程（指導教員は山住正己）、さらには博士課程へと進学された。

梅原氏が学部から大学院に進学した時代は、文部省の教育内容統制に対する国民的な運動が盛り上がり、それを支える理論的な展開が急務として求められていた。杉本判决(1970年)に代表される教科書検定裁判、最高裁学力テスト旭川判決（1976年）に代表される全国学力テスト裁判など、今日の実用教育法の到達点ともいえる判決が次々と出されていた。その背景には、戦後各地で積み重ねられてきた教師たちによる教育課程の自主編成運動の存在があった。氏はまさに時代の要請を受けた研究を行なうことになっていく。

大学院博士課程在学時から事務局として参加された中央教育課程検討委員会（会長、梅根悟、日本教職員組合の委嘱による）による1976年の「教育課程改革試案」は、民間による教

育課程の「原理・内容・方法」の総合的、包括的な指針を示すものであり、その後の日本の教育の様々な分野に影響を与えた画期的なものとなった。梅原氏は「教育課程の定義と編成主体が明確に示され、それまでの教育課程行政の抜本的な改革が提案された」と評している。例えばそこに盛り込まれた「総合学習」といった新たな概念が、その和光学園の教育に盛り込まれ、十数年のスパンを経て国の教育課程に（異なった形で）取り入れられていくことになる。

梅原氏の研究は当初から一貫して、国の教育内容政策、特に学習指導要領に対する批判的なスタンスに立つものであった。卒業論文では1968年改定の学習指導要領の理科分野に対して民間の授業実践研究を対峙し、修士論文では1958年学習指導要領における理科と技術科の関連を批判した。その後、研究対象は教育課程全体に拡大され、学力問題へも発展されていくことになる。

学習指導要領の改訂に際して、その政策的背景、内容分析、対抗的な教育実践の在り方について常に現場の教師たちに寄り添う形で研究を進め著書を発表してきた。「新指導要領と子ども」(1990)、「指導要領をこえる学校づくり」(1998)、「新学習指導要領を主体的につかむ」(2018)など一連の著作は、教育政策を批判して自らの教育実践を守る学校現場の実際の指標としての役割をはたしてきた。

梅原氏は教育課程を「主として学校において、望ましい人格形成を促すために行う、教育的働きかけの全体計画である。——教育課程の実践とは、教育課程づくり・教育実践・実践の総括・新しい教育課程づくりという一連の流れの中で、子どもの人格形成を実現しようとする目的意識的な活動」(1988年)と定義し、子どもの人格形成を促すことを軸に教育課程をとらえていく。後に、この定義をやや動的なものに修正し、また自らの研究全体を「カリキュラム研究を拠点に、総合的な人間学の探究に関心が向かっている」と評している。

その人格形成を促す教育課程の在り方に着目するスタンスから、現実の学校現場で起きている子どもたちの問題、不登校やいじめ問題などに早くから関心を向け研究対象とされてきた。各地の不登校の親の会や様々な運動にも深く関わってこられた。

3.11の東日本大震災、福島原発事故の後に、日本の科学技術政策への思いを振り返って「無自覚の結果責任に対する反省と償い」の強い思いを抱かれた。そして「人間復興」という視点から、被災地の教育実践を多く訪問調査研究されるとともに、教育学者による「原子力・エネルギー教育研究会」を立ち上げ、それまでの科学技術教育の在り方を対象化する試みも行っている。

2 和光大学での仕事

1995年に人間関係学部開設時に人間発達学科長を務め、2006年から新学部開設準備委員長、2007年から新たに開設された現代人間学部長に就任した

2010年から2013年まで、伊東達夫学長のもとで初代副学長を務めた。氏の教育課程研

究の専門性は一貫して、新しい学部、学科構想、大学運営に活かされてきた。

「教育学」などの他に、学科の看板授業である「いじめ・不登校の教育学」を長年担当され、不登校経験者も多い和光大学の学生たちの関心を集めてきた。

学生、院生の教育には大変熱心に取り組まれ、教育領域のみならず政治や芸術分野などさまざまな領域で社会の一線で活躍している多くの卒業生を輩出してこられた。「人格形成」をめざすという梅原氏の研究領域、度量の広さがそれを支えてこられたのであろう。また、障がいを持つ学生たちを積極的に受け入れ指導してきた。

入門ゼミである「プロゼミ」では、「子どもの現実から現代人間の課題を考える」というテーマを掲げて、実際に子どものいる現場、「冒険遊び場、たぬき山」などへのフィールドワークを行うのが常だった。また、合宿や研究室での鍋パーティーなど学生たちのとの日常的な交流に対しても積極的に取り組み、人格的な触れ合いの中で学生たちの人間形成をめざしてきた。最終講義の際には広い教室に多くの卒業生が集まり、いかに氏が学生たちから慕われていたのかを示していた。

〔やまもと ゆみ・和光大学現代人間学部心理教育学科教授〕